

すみれ・なのはな学級

- 1 研究主題 「表現力・コミュニケーション力を高める指導方法の工夫」
ー 音楽科の合同授業を通して ー

音楽は、ノンバーバルなコミュニケーションで人と人をつなぐ手段であり、言葉と同じ意味合いをもつ。形のない音や音楽を感じたり聴くことは、活動内容により能動的・受身的であるので、様々な実態の子どもたちが同一の場で楽しさを共有できる。また、音や音楽でのやりとりは、対人関係の形成や言語発達の促進、さらには社会的な相互交流の手段にもなる。

2 育てたい力

◆表現力

- 臆せずに歌唱等で自分なりの表現の仕方で発表できる力
- 聴きとめる力・聴き分ける力
- 全身をリズムカルに動かし、表現できる力
- 楽器に関心をもち、親しみをもって扱い、表現できる力
- 心地よい音楽を静かに聴くことができる力

◆コミュニケーション力

- 音楽を媒体とし共感できる力
- 表現したいという欲求を自分なりの伝達手段で表せる力
- 楽しい自然な雰囲気の中で会話ができる力

3 研究の視点と手だて

〔視点1〕 音楽の学習は児童にとってまず興味関心のもてる活動であること

- 題材選定と指導内容の工夫に配慮し、活動にバリエーションを加え持続性を図る。

〔視点2〕 生き生きと活動することのできる集団の構成と活動の場を考慮する

- 座席位置に配慮し、教師と児童個々が相互にかかわりがもてるようにする。

〔視点3〕 音楽活動の日常化・生活化を図ること

- 朝の会等、日常生活の中で音楽に親しむことができるように他教科との関連を図る。

〔視点4〕 自発性・積極性を促す創造的な音楽活動を工夫すること

- 活動内容に変化をもたせ、教材や教具への工夫を加える

すみれ・なのはな学級 成果と課題

特別支援学級では表現力・コミュニケーション力を高める指導方法の工夫という校内研究テーマにせまるために音楽科の合同授業を通して研究に取り組んできた。研究の視点と手だてを通して明らかになった成果と課題については以下のとおりである。

<成 果>

〔視点１〕音楽の学習は児童にとってまず興味関心のもてる活動であること

○歌唱、器楽、身体表現、鑑賞の音楽科の４領域の活動を１単位時間の中にバランスよく取り入れ、活動の仕方に静的活動、動的活動を組み合わせバリエーションを加えたことにより児童個々の自己表現力が高揚した。

〔視点２〕生き生きと活動することのできる集団の構成と活動の場を考慮する

○音楽科における個々の実態は様々である。題材ごとの児童の興味関心に応じてグルーピングや座席位置、学習空間について配慮した結果、自然発生的な対人同士の相互交渉が発生し音楽を媒体として共感できる力が育った。

〔視点３〕音楽活動の日常化・生活化を図ること

○平素の生活の中での音楽の日常化は、情意の安定に欠かせない大切な要素である。普段から色々な場面でクラシックを流したり、朝の会での歌の活動（合唱、独唱、カラオケでの独唱等）をふんだんに取り入れることで、自己表現力やコミュニケーション力が高まった。また、体育科でのリズム運動など他教科との関連を図ることで、全身での表現力が育った。

〔視点４〕自発性・積極性を促す創造的な音楽活動を工夫すること

○学級の子供たちは皆、音楽が大好きである。活動内容を工夫して変化をもたせた身近な音楽に自然に親しませることで、表現したいという欲求が少しずつ高まった。週１回の音楽科の授業であるが、児童個々が活動の楽しさを十分に味わえるようになってきており、楽しい自然な雰囲気の中での会話も豊かになった。

<課 題>

▲学年差が大きい集団であり、その実態も様々であるが、一年間を通して音楽科としての学習として成立し、児童個々にも学習に意欲的・積極的に臨む姿勢が培われてきた。ただし音楽科の学習を通して表現力やコミュニケーション能力の育成するという見地から考えると、週１単位時間の扱いでよいものか指導者として一考を要する。次年度の児童の集団構成と児童の実態から考えたい。また、生活へのうるおいや情意の安定を図る上での音楽へのかかわりの点で様々な手だてを考慮し、児童個々に潜在する表現力、コミュニケーション力をできる限り引き出していきたいと考える。